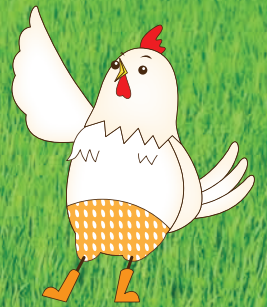


人も家畜も笑顔になれる

これからの 田んぼの話



卵の黄身が…!?

この卵、黄身がかなり白味がかっているのがお分かりでしょうか。実はこれ、お米を食べて育った鶏が産んだ卵なのです。この卵を生産しているのは、北海道の竹内養鶏場。何と、飼料の99.8%が北海道産で、そのうち68%を飼料用米が占めています。一般的に、鶏のエサの多くはトウモロコシ。黄身の色はエサの色が反映されるので黄色くなりますが、お米で育てた鶏の黄身は白くなるのです。

僕が
田んぼすころくで
解説します!



お米は人間だけのものじゃない?

「あれ? 田んぼの話なのに卵?」——そう思われた方も多いかもしれません。私たちの食生活に欠かせないお米ですが、実は家畜のエサとしても使われているんです。毎年8万tペースで減少していく主食用米の需要に対し、「飼料用米」の生産量を拡大することで、田んぼを保持していこうという取り組みが始まっています。



地産地消の循環型農業で、生産者、消費者のみんなが笑顔に！

トキワ養鶏が進める循環型農業とは…

青森県にある常盤村養鶏農業協同組合（トキワ養鶏）では、休耕田を利用した飼料用米作りを稲作農家に提案。「稲作農家さんは休耕田を有効に使うことができ、私たちも安定した飼料の供給が受けられます。消費者の皆さんからも、生産者の顔が見えると安心のお言葉をいただいています」（トキワ養鶏・三浦祐哉主任）

トキワ養鶏さんの飼料は、約7割が国産。しかも地元で採れたものを使っています。

トウモロコシなどの家畜のエサは、ほとんどが輸入されています。それを国産の飼料用米に替えていくことで、安定的に供給できるのです。

主食用米等の需要量の推移

全国で毎年約8万 t ペースで減少



※注:平成8/9年の値は平成8年7月～9年6月まで、平成25/26年の値は平成25年7月～26年6月までの需要量
資料:米穀の需給及び価格の安定に関する基本指針（平成27年3月）

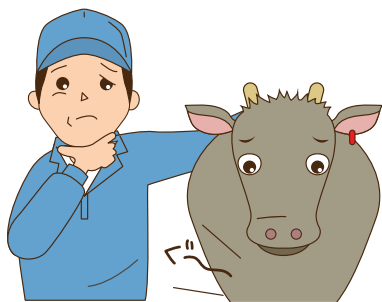
私たちの食生活に欠かせないごはんなどの主食用米。主食用米の需要が減り続ける昨今、これからの田んぼのあり方に注目が集まっています。地域の活性化にもつながる飼料用米の生産で、田んぼの有効活用を目指します。

田んぼをフルに活用しよう！

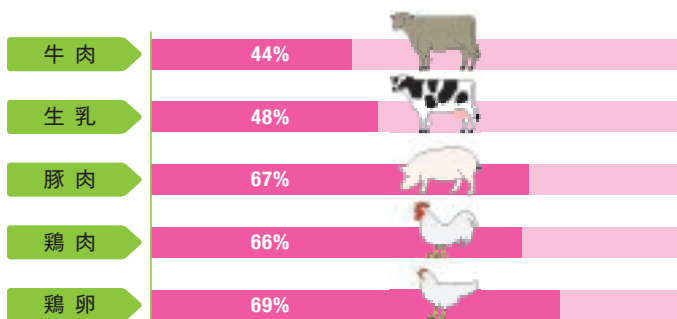
お米の需要が減少している今こそ

次からは事例をご紹介します

安定して供給される
国産飼料用米なら
安心かも…



経営コストに占める飼料費の割合



資料:平成25年度畜産物生産費調査、平成25年営農類型別経営統計より作成

飼料の自給率アップで 農畜産業を活性化

国内の畜産飼料の25～26%は、国内で賄っています。このうち「濃厚飼料」と呼ばれる穀物を中心とした飼料は、11～12%程度にとどまっています。

一方、経営コストに占める飼料費の割合はかなり高く、採卵経営に至っては約70%。その飼料が輸入頼みという状況は、飼料の安定供給という観点から考えても不安定であり、輸入飼料の高騰は、畜産経営への直接的な打撃につながります。

そこで農林水産省では、平成37年度までに飼料の供給量に占める国産の割合（自給率）を40%にすることを目標に定めました。

目標達成には、濃厚飼料の一つである飼料用米の増産が不可欠です。飼料用米の生産量を増やすことで、安定供給が可能となります。国産のエサ、米育ちなどを謳って畜産物のブランド化も図れるほか、耕畜連携による地産地消の推進など、農畜産業の活性化にもつながると期待されています。

田んぼをフル活用するために注目されているのが、飼料用米の生産。人が食べる量が減った分を、家畜のエサに振り分ける仕組みです。

お米の国内消費量はだんだん減っています。しかし、安定した食料供給や国土・自然環境の保全のためには、田んぼを維持し続けなければなりません。

田んぼのさまざまな機能って、何？



田んぼには、食料の生産以外にも、さまざまな機能があります。例えば、洪水の防止。田んぼには堰板（せきいた）が設置され、水の出口が狭くなっています。それにより、大雨が降っても、田んぼに水が貯まることで流れ出る水量が減るので、洪水を防ぐことができます。

田んぼをフル活用するために注目されている「飼料用米」

お米は私たち日本人にとって欠かせない大切な主食。ところが、高齢化や人口減少、食生活の変化などにより、一人あたりの消費量はここ50年ではほぼ半分にまで減ってしまいました。今後もこの傾向は続くことが予想されています。

お米を生産する田んぼは、食料の生産以外にも、洪水や土壌侵食の防止、河川の水量を安定させるなど、国土・自然環境の保全などのさまざまな機能を担っているため、維持しておく必要があるのです。

そこで、主食用以外の家畜のエサにする飼料用米などの作物を生産。優れた生産装置である田んぼをフルに活用